

## 【レジュメ】

### 与謝野晶子とジョルジュ・サンド

#### ～自由と自立への闘い～

『国際シンポジウム 交叉する文化 日本 - フランス 報告集』

(大阪府立大学、2006年9月、pp.203-213)

村田京子

与謝野晶子 (1878-1942) は堺を代表する歌人であり、一方、ジョルジュ・サンド (1804-1876) はフランスの有名な女性作家である。どちらもそれぞれの国において、フェミニズムの先駆けとみなされている。与謝野はサンドが亡くなった後に生まれた次世代の女性ではあるが、時間、空間の隔たりにも関わらず、両者には共通点が多く見いだせる。それをまとめると、次のようになる。

1. ロマン主義運動の影響：サンドにとってはフランスにおける 1830 年のロマン主義革命が、与謝野にとっては新詩社および機関誌「明星」によるロマン主義運動が、それぞれ『アンディヤナ』、『みだれ髪』を生み出す原動力になった。両作品には自我の自由な解放が謳われている。

2. 職業作家としての自覚：二人の女性は「書く」ことで生活の糧を得る「働く女」であった。二人にとって女の自立は、経済的自立なしには考えられなかった。

3. 婦人参政権運動への態度：二人は、運動に積極的に加担することはせず、サンドは女性の参政権よりもまず市民権を要求すべきとし、晶子は女性の自覚を促した。そのためには女子教育の改革が必要だと二人は説いた。「良妻賢母」教育への批判。

4. 二人は性別による価値判断（「男らしさ」「女らしさ」の概念）を否定し、「人間」という視点を掲げた。そこには現代に通じる観点が見いだせる。

与謝野晶子がジョルジュ・サンドの作品を読んだとは思えないが、共通の文化的土壌（ロマン主義運動）、晶子が自由と独立の伝統を誇る堺—かつて強大な自治防衛組織を持った自由都市として栄えた町—の出であること、二人が自らの労働によって経済的自立を果たしていたこと、などの要素が二人の女性を思想的に接近させたと考えられる。